

## 「鶺鴒」考—世阿弥・芭蕉・誓子

### A study on 'Ukai': Zeami, Basho and Seishi

松井 貴子

MATSUI Takako

---

**Abstract:** YAMAGUCHI Seishi (1901-1994) composed approximately 60 haikus on *ukai*, or cormorant fishing through his life. He watched fishing with cormorants at Nagara river in Gifu prefecture in 1956. That was an extraordinarily special experience because he took a boat for cormorant fishing which was forbidden being on board except for cormorant fishermen. He was excited about the fire of the fishing boats and deeply moved by the darkness and silence after the fishing. His *ukai* haiku followed Zeami's Noh play 'ukai' and Basho's famous haiku on *ukai*. Seishi successfully modernized their premodern *ukai* works.

---

**Keywords:** 鶺鴒、世阿弥、芭蕉、山口誓子、能、俳句、鶺鴒舟、鶺鴒篝、岐阜、長良川、伝統、近代化

cormorant fishing, Zeami, Basho, YAMAGUCHI Seishi, Noh, haiku, a boat for cormorant fishing, a fire to attract fish, Nagara river in Gifu prefecture, tradition, modernization

---

山口誓子は、岐阜市を流れる長良川の鶺鴒を何度か観覧した。その折々に鶺鴒を詠んだ誓子の句は、生涯を通じて、およそ六十句ほどの数に上る。(註1)

「鶺鴒の早瀬を過ぐる大炎上」(『方位』昭和三一)(註2)に代表される誓子の鶺鴒句は、鶺鴒舟を詠んだ芭蕉の句と世阿弥改作の謡曲「鶺鴒」に連なるものとして位置づけることができる。そして、誓子は、現代に生きた俳人として、芭蕉とも世阿弥とも異なる眼で、鶺鴒を詠んでもいる。このような誓子の鶺鴒句について、篝火に注目して考察を加えたい。

#### 1 鶺鴒の炎上—風折烏帽子の篝

誓子は、最も印象深かったであろう鶺鴒観覧について次のように記している。

昭和三十一年、私達は鶺鴒を見た。鶺鴒匠頭は私の鶺鴒舟に乗ることを許した。私は鶺鴒匠と同じ黒装をした。女性は鶺鴒舟に乗ることを許されない。しかし鶺鴒匠頭は、特に多佳子に乗船を許した。多佳子も鶺鴒匠と同じ黒装をした。

私達は別の舟に分乗して、上流より鵜川を下った。(註 3)

本来、許されない鵜舟への乗船が特別に許可され、誓子は橋本多佳子とともに、この上なく稀有な経験をした。鵜匠の装束を身につけて鵜舟から鵜飼を見たのが、昭和三十一年七月である。その高揚した気持を、誓子は「鵜遣ひと同舟瀬を過ぎ淵を過ぎ」「火の粉はげし鵜匠と同じ黒装束」(『方位』昭和三一) (註 4) と詠んだ。この年に作られた鵜飼句は、誓子の鵜飼句全体のほぼ八割を占める。次のような句も、鵜匠と行動をともしたからこそ詠むことができたものである。

鵜篝を焚く直前の鉄組みよ (『方位』昭和三一) (註 5)

水に下す鵜のこれよりの水働き (『方位』昭和三一) (註 6)

進むすすむ狭き鵜舟に吾が身起て (『方位』昭和三一) (註 7)

篝火のすすむが故に鵜舟すすむ (『方位』昭和三一) (註 8)

誓子は、「いまここが岐阜の中心鵜川燃ゆ」(『方位』昭和三一) (註 9) と、鵜飼の地岐阜への挨拶句も作っている。この年は、八月にも岐阜に行って鵜飼を見た。(註 10)

昭和三十六年には、長良河畔に「鵜篝の早瀬を過ぐる大炎上」の句碑が建てられた。多佳子の「早瀬ゆく鵜綱のもつれもつれるまま」の句碑も同じ所にある。誓子は、「鵜篝の早瀬を過ぐる大炎上」の句に、「長良川の鵜飼。私は鵜舟に乗ることを許され、黒装束をつけて川を下った。急流を通るとき、篝火は燃え盛って、大炎上。鵜飼の最佳境を体験したのだ。」(註 11) という自註を付した。この句には、誓子が実感した鵜飼の興奮と感動が凝縮されている。鵜舟に乗り、鵜匠と同じ位置にあって鵜飼を見た誓子の眼は、鵜篝の激しさに釘付けとなっている。最佳境に向けての心の高まりと、冷めやらない興奮が、「鵜篝の早瀬を過ぐる大炎上」の句を挟んで鵜篝を詠んだ句の連なりから読み取れる。

紅き火に鵜の精魂を尽くさしむ (『方位』昭和三一) (註 12)

鵜篝の火のかたまりは絶えず揺る (『方位』昭和三一) (註 13)

鵜篝の早瀬を過ぐる大炎上 (『方位』昭和三一) (註 14)

鵜の川を流るる余燼しぶとさよ (『方位』昭和三一) (註 15)

鵜舟の中にあり火の粉の中にあり (『方位』昭和三一) (註 16)

誓子が、まず眼を奪われたのは、鵜篝が盛んに燃え上がる様子であった。焼けるほどの近さで見た鵜篝に対峙するには、相応に強靱な精神力が必要である。誓子は、鵜篝が放つ生命力を存分に身に受け、十七文字に凝縮して応えた。鵜舟が流れに乗って、観客の待つ晴れの場に向う間、「吾が鵜篝を下流にて感じをらん」(『方位』昭和三一) (註 17) と詠むほどまでに鵜篝を

自分のものとして、炎のなかに心を放ったのである。

## 2 鶺鴒舟の無常、鶺鴒のあとさき—誓子の眼

誓子は、その晩年に、「鶺鴒の川を芭蕉も眼にて止めて見し」(『大洋』平成二)(註18)と詠み、自らの鶺鴒体験から芭蕉の鶺鴒句に思いを馳せている。芭蕉には、「おもしろうてやがて悲しき鶺鴒舟哉」の鶺鴒句がある。貞享五(1688)年六月八日、芭蕉は岐阜に到着し、長良川に程近い妙照寺に滞在した。(註19)長良川の鶺鴒を見て作られたのが、この句である。

芭蕉の鶺鴒句に対する誓子の評釈は、次のようなものであった。

波を照らす篝火に近々と見た鶺鴒は、眼もさめるばかり美しく、まことに趣の深いものであった。(註20)

鶺鴒舟は幾許もなくその場を通り過ぎ、下流に向つて去っていった。その一刻の美しく面白かつただけに、鶺鴒舟の去つたあとのかなしさは比類がなかつた。芭蕉はさういふ感情を、包まず隠さずに表出した。だからその感情は一本の棒のやうにこの句を貫いている。(註21)

「鶺鴒舟」は鶺鴒舟であるが、「鶺鴒かな」と言わず「鶺鴒舟哉」と言つたために、舟の形がくっきり見えて来る。「鶺鴒舟哉」の彫琢を私は感嘆する。(註22)

誓子は、この芭蕉句に、自分が間近で鶺鴒を見た実体験を重ねている。鶺鴒篝の炎に圧倒されそうになりながらも誓子は、芭蕉への共感を確かに感じ、句に表明した。

歎びの時は過ぎゆく鶺鴒川迅し(『方位』昭和三一)(註23)

この句には、「鶺鴒舟を見て、面白くと思ひ、歎んだ。しかしその歎びの時間は直ぐに経過してしまう。鶺鴒舟の川の迅い流れが歎びの時間を流してしまうのだ。」(註24)という誓子の自註がある。誓子が、歎喜を感じる時間が余韻に浸る間もなく過ぎ去ってしまうことを意識したのは、芭蕉が、長良川の鶺鴒舟に面白さから悲しさへの変化を感じ取つたことにつながる。誓子は、自分の鶺鴒体験から芭蕉が見たであろう鶺鴒舟の状況を想像し、心の動きを追体験した。その様子を次のように記している。

芭蕉は鶺鴒舟を見たのである。篝火は舟とともに下ってくる。数羽の鶺鴒は前進しつつ、水に潜っては首を出し、長い首を振って水気を払う。そういう鶺鴒のはたらきが篝火に照らされて見える。そんなところを見て芭蕉は楽しんだが、時の経過とともにその楽しみは悲しみへ変わって行った。そればかりではない。鶺鴒舟が舟に引き揚げられて、獲たところの鮎を吐かされるのも哀れであった。

鶺鴒舟は一瞬もとどまることなく、常在することなく、時とともに移って行った。無常迅速な

のであった。面白うて、やがてそのうちに悲しくなるのは、無常迅速から来るのである。(註 25)

そして、鶺鴒の陰で休む鶺鴒の様子にも眼を向け、鶺鴒が最高潮に達した後の感情の鎮静を待っている。

疲れ鶺鴒が吾がゐる舟にみな上る (『方位』 昭和三一) (註 26)

疲れ鶺鴒は嘴噛みあはせいたはりあふ (『方位』 昭和三一) (註 27)

鶺鴒のやさしき鶺鴒匠の腰の蓑を噛む (『方位』 昭和三一) (註 28)

誓子はまた、芭蕉が「悲しき」と感じた鶺鴒の終わりがもたらす心の動きを、籥の変化に託して表現した。

荒瀬つづきて鶺鴒の衰ふる (『方位』 昭和三一) (註 29)

燠となりこぼれてしまふ鶺鴒の籥 (『青銅』 昭和三六) (註 30)

時の流れを速く感じる誓子の意識は、「鶺鴒の川の迅さよ時の流れより」(『方位』 昭和三一) (註 31) の句と、その自註「鶺鴒の川の流れは早い。ずんずん流れて行く。その流れも時間の支配を受けているにちがいないが、時の刻みよりも早いのだ。」(註 32) に表れている。時間は休むことなく過ぎ、自然も同じく絶え間なく動き、時の流れを超えて変化する姿を見せる。時間と自然に対する、このような誓子の意識は、芭蕉の無常観に重なる。

誓子は、鶺鴒舟と川の流れを体感しながら得た不思議な感じを率直に表現しつつ、一方で、近代人らしい眼で、自然と人工物の関係を把握している。

吾が眼には鶺鴒の川よりも鶺鴒舟迅し (『方位』 昭和三一) (註 33)

鶺鴒と鶺鴒舟流るるものは同じ速さ (『方位』 昭和三一) (註 34)

鶺鴒舟の動きは、人為的なものである。人間が作った道具によって、自然の動きに対して人間が働きかけた結果である。自然の動きに勝った鶺鴒舟の動きは川の流れより速く、同じく人間に操られている鶺鴒舟と鶺鴒は、人の手が加わった流れの速度に乗っている。

誓子は、芭蕉と同じ川で鶺鴒を詠んだ。先人の感動を受け継ぎながら、近代人としての感覚を發揮し、新たな時代に生き得る作品群としたのである。

### 3 鶺鴒の闇

誓子は、芭蕉の鶺鴒句の源泉について、「この句を解するときによく謡曲「鶺鴒」が引き合い

に出される。」(註 35)と言及し、「芭蕉が謡曲の言葉を借りたかどうか、そんなに簡単に決められない。」(註 36)と自分の考えを述べている。芭蕉の鶺鴒句に、謡曲「鶺鴒」の影響があるとする見方は、句に使われた「面白うてやがて悲しき」という言葉に加えて、芭蕉が、次のような俳文「鶺鴒舟」とともに、この句を記していることにもよる。

ぎふの庄ながら川のうかひとて、よにことト\しう云ひのゝしる。まことや其興の人のかたり伝ふるにたがはず、浅智短才の筆にもことばにも尽べきにもあらず。心しれらん人に見せばやなど云て、やみちにかへる、此身の名ごりをしさをいかにせむ。(註 37)

ここに引用されている「やみちにかへる、此身の名ごりをしさをいかにせむ。」が、謡曲「鶺鴒」の詞章を思い起こさせるのである。謡曲「鶺鴒」は、榎並左衛門五郎の原作を世阿弥が改作したもので、五番目物に分類され、鬼物ともいわれる。前シテ(前半の主役)として鶺鴒使いの老人が登場し、執心の鶺鴒使いを見せる「鶺鴒ノ段」が一曲の山場である。謡曲の鶺鴒の場は、長良川ではなく、石和川(山梨県)である。長良川鶺鴒では、鶺鴒匠(註 38)が鶺鴒舟に乗って、十二羽の鶺鴒を同時に使う。石和川では、少数の鶺鴒とともに鶺鴒使いが川に入る徒歩(かち)鶺鴒である。いずれの川でも鶺鴒篝が焚かれる。

芭蕉の句につながるのは、謡曲「鶺鴒」(註 39)の、次のような詞章である。

一セイ「鶺鴒舟にともす篝火の。後の闇路を如何にせん」(註 40)

下歌「鶺鴒舟に灯す篝火の消えて闇こそ悲しけれ」(註 41)

上歌「面白の有様や。底にも見ゆる篝火に。驚く魚(うお)を追ひ廻し。潜(かず)き上げ抄(すく)ひ上げ。隙(ひま)なく魚を食ふ時ハ。罪も報いも。後の世も忘れ果てゝ面白や。」(註 42)

上歌「不思議やな篝火の。燃えても影の暗くなるハ。思ひ出でたり月になりぬる悲しさよ。鶺鴒舟の篝影消えて。闇路に帰るこの身の名残惜しさを。如何にせん名残惜しさを如何にせん」(註 43)

芭蕉の句と俳文が、謡曲の詞章を取り入れているように見えるのは明らかである。それでも、誓子が、芭蕉が謡曲を借りたかどうか短絡的な判断を保留したのは、表面上、芭蕉が世阿弥と同じ言葉を使っているという理由だけでは、そこに、世阿弥とは異なる芭蕉独自の考えが込められている可能性を否定できなかったからであろう。

誓子自身は、芭蕉と謡曲の直接的なつながりに懐疑的でいながら、芭蕉や世阿弥と同様に、鶺鴒篝があるがゆえに作り出される闇を見つめている。

火のために鶺鴒は暗き個所多し（『方位』昭和三一）（註44）

鶺鴒の燃ゆる火中（ほなか）になほ黒木（『方位』昭和三一）（註45）

鶺鴒の暗む以上にあたり暗む（『方位』昭和三一）（註46）

強い明るさがあればこそ、その周囲に広がる闇はより暗いものになる。誓子の眼は、鶺鴒の炎が作り出す闇を、芭蕉よりも、世阿弥よりも精緻に見出している。そして、鶺鴒が燃え尽きようとするとき、鶺鴒の後に迫り来る闇が呼び起こす心の動揺を、句の奥底に籠めている。

鶺鴒のあとより何か闇をゆく（『方位』昭和三一）（註47）

終ひ鶺鴒に鶺鴒の霊と川の霊（『方位』昭和三一）（註48）

離りゆく終ひ鶺鴒の火を見送る（『方位』昭和三一）（註49）

鶺鴒の火炎ちぎれてはやあらず（『一隅』昭和三九）（註50）

世阿弥の「鶺鴒」は、鮎取りを生業として殺生戒を犯す鶺鴒使いが後の世の報いを怖れる心と法華経の功德が主題である。誓子の句は、同じく生き物の死を詠んでいるが、仏教的ではなく、長良川の鶺鴒が鶺鴒に注ぐ特別な愛情に眼が向けられている。

死を嘆く君が使ひし鶺鴒のすべて（『一隅』昭和三九）（註51）

そして、誓子は、鶺鴒の後の闇に加えて、闇の後に続く時間、鶺鴒の夜が明けた後にも眼を向けている。

ただ水の行くのみ鶺鴒川夜が明けて（『紅日』昭和五四）（註52）

鶺鴒川昼はモーター艇許す（『大洋』昭和六三）（註53）

屋形舟停め鶺鴒の川を流れしむ（『大洋』平成二）（註54）

鶺鴒という人為の業が展開された夜が明けた早朝、川は、鶺鴒匠が使う鶺鴒にも、鶺鴒舟にも、鶺鴒にも、何物にもかき乱されることなく、ただ自然のままに、流れ行く姿を見せる。世阿弥が謡曲を通して投げかけた疑問に、誓子としての答を出しているかのようなのである。誓子が眺める長良川は、近代の機械文明の産物から逃れることはできない。その鶺鴒川を見つめる誓子の眼もまた、紛れもなく近代人のものである。先人たちが、それぞれの時代の鶺鴒に託して描き出した心の動きを味わい、その本質に感動しながら、それを、そのままに自己の作品世界にまとうせることはしていない。無自覚な再現は無意味だからである。誓子の鶺鴒句群は、芭蕉と世阿弥の作品世界を確かに響かせて、近代の作品世界を作り出した。近代化を経た古典として鶺鴒句が存立することを具現した作品と位置づけることができる。伝統は、時代の変化と対峙し、

融和し、それを包含することで、時代を越える力を得る。前近代の世阿弥と芭蕉によって作られた鶉飼句の系譜を、誓子は近代に引き出し、次代に繋がる価値を付与したのである。

## 註

- 註1 『季題別 山口誓子全句集』平成10・12 本阿弥書店 144—147 頁
- 註2 『季題別 山口誓子全句集』145 頁
- 註3 「岐阜」『句碑をたずねて』昭和41・11 朝日新聞社、『山口誓子全集』第十卷 昭和52・10 明治書院 47 頁
- 註4 『季題別 山口誓子全句集』146 頁
- 註5 『季題別 山口誓子全句集』145 頁
- 註6 『季題別 山口誓子全句集』145 頁
- 註7 『季題別 山口誓子全句集』145 頁
- 註8 『季題別 山口誓子全句集』145 頁
- 註9 『季題別 山口誓子全句集』145 頁
- 註10 「年譜」『山口誓子全集』第十卷 223 頁
- 註11 自註現代俳句シリーズ第一期㊄『山口誓子集』昭和54・6 俳人協会 73 頁
- 註12 『季題別 山口誓子全句集』145 頁
- 註13 『季題別 山口誓子全句集』145 頁
- 註14 『季題別 山口誓子全句集』145 頁
- 註15 『季題別 山口誓子全句集』146 頁
- 註16 『季題別 山口誓子全句集』146 頁
- 註17 『季題別 山口誓子全句集』146 頁
- 註18 『季題別 山口誓子全句集』147 頁
- 註19 井本農一他校注『校本芭蕉全集』第九卷 平成元・10 富士見書房 180—181 頁
- 註20 『俳句の復活』昭和24・1 白玉書房、『山口誓子全集』第六卷 昭和52・5 明治書院 239 頁
- 註21 『俳句の復活』、『山口誓子全集』第六卷 239 頁
- 註22 『芭蕉秀句』昭和38・4 春秋社、『山口誓子全集』第六卷 238 頁
- 芭蕉の句には「鶉舟哉」を「鶉飼哉」としたものも残っている。(阿部喜三男校注、堀信夫補訂『校本芭蕉全集』一卷 昭和63・10 158—159 頁)
- 註23 『季題別 山口誓子全句集』144 頁
- 註24 自註現代俳句シリーズ第一期㊄『山口誓子集』72 頁
- 註25 『芭蕉秀句』、『山口誓子全集』第六卷 238 頁
- 註26 『季題別 山口誓子全句集』146 頁
- 註27 『季題別 山口誓子全句集』146 頁

- 註 28 『季題別 山口誓子全句集』 146 頁
- 註 29 『季題別 山口誓子全句集』 145 頁
- 註 30 『季題別 山口誓子全句集』 146 頁
- 註 31 『季題別 山口誓子全句集』 145 頁
- 註 32 自註現代俳句シリーズ第一期 28 『山口誓子集』 73 頁
- 註 33 『季題別 山口誓子全句集』 145 頁
- 註 34 『季題別 山口誓子全句集』 145 頁
- 註 35 『芭蕉秀句』、『山口誓子全集』 第六卷 238 頁
- 註 36 『芭蕉秀句』、『山口誓子全集』 第六卷 238 頁
- 註 37 「鵜舟」 井本農一、尾形仇他校注『校本芭蕉全集』 第六卷 平成元・6 富士見書房 374—375 頁
- 註 38 鵜匠制度は、大名が特定の鵜飼漁業者に排他的な漁業特権を与え、経済的援助を行うものである。長良川鵜飼を庇護したのは尾張徳川家であった。(可児弘明 中公新書 109『鵜飼—よみがえる民族と伝承』 昭和 41・8 初版、平成 11・10 復刻版 中央公論新社 68 頁)
- 註 39 謡曲「鵜飼」の詞章は、西野春雄校注「鵜飼」(新日本古典文学大系 57『謡曲百番』 平成 10・3 岩波書店 244—249 頁)に、翻刻され、注と解説が付されている。
- 註 40 『観世流謡曲百番集』 昭和 58・12 (64 版) 檜書店 962 頁
- 註 41 『観世流謡曲百番集』 962 頁
- 註 42 『観世流謡曲百番集』 968 頁
- 註 43 『観世流謡曲百番集』 968 頁
- 註 44 『季題別 山口誓子全句集』 145 頁
- 註 45 『季題別 山口誓子全句集』 145 頁
- 註 46 『季題別 山口誓子全句集』 146 頁
- 註 47 『季題別 山口誓子全句集』 146 頁
- 註 48 『季題別 山口誓子全句集』 146 頁
- 註 49 『季題別 山口誓子全句集』 146 頁
- 註 50 『季題別 山口誓子全句集』 146 頁
- 註 51 『季題別 山口誓子全句集』 146 頁
- 註 52 『季題別 山口誓子全句集』 147 頁
- 註 53 『季題別 山口誓子全句集』 147 頁
- 註 54 『季題別 山口誓子全句集』 147 頁

付記 本稿は、観世流能楽師、杉澤陽子師主催の能楽講座第 15 回 (2007 年 9 月 15 日 (土)) 於津田塾大学同窓会) で講じた「鵜簞の響き—能から俳句へ」をもとにしている。

(received Feb. 2016)